

オランダ語の新バリエーション

—ベルギー北部における「Tussentaal」(オランダ語中間言語)の実態—

Ruth Vanbaelen

キーワード：標準語、方言、中間言語

1. はじめに

1980年代後半からベルギー北部においてオランダ語の標準語でもなく、方言でもない、いわゆる新バリエーションが発生している。このバリエーションは“Tussentaal”(オランダ語中間言語¹)と呼ばれ、現在ますます普及しつつある。本稿は、まずオランダ語中間言語の言語的特徴を概観する。次いで、ベルギー北部における言語に対する態度を考慮しながらオランダ語中間言語が生じた原因、また、その機能について述べる。最後に、今後のオランダ語中間言語の発展について述べる。

2. オランダ語中間言語の特徴

この節では、オランダ語中間言語の特徴(文法・語彙・音声・方言から方言への影響)を挙げる。ただ、中間言語は標準語と方言の両方の要素を利用するため、話者の方言や標準語使用の度合いなどによって、実際の現れは話者によって多少異なってくる。誇張した言い方をすれば、中間言語は話者の数だけバリエーションがある²。したがって、このようなバリエーションは個人言語(idiolect)や方言と捉えられる可能性がある。しかしながら、利用者の方言とは異なる別の地域の方言の特徴が現れること、また、方言より広い地域に理解されることから、オランダ語中間言語は個人言語や方言を超える概念だと考えられる。

2.1 文法

2.1.1 動詞の語順

従属節において2つ連続で用いられる助動詞の間に単語を割り込ませることは非文法的

¹ オランダ語の“Tussentaal”の直訳は「中間言語」であるが、本稿はオランダ語のみ扱うため、また言語習得段階の「中間言語」(Selinker 1972 が提案した“Interlanguage”)との混乱を防ぐため、執筆者は「オランダ語中間言語」を使用する。第二言語習得の分野に使用される“Interlanguage”との関連については4.2節に記述する。

² これは「オランダ語中間言語」の特徴をまとめた書物が少ない理由の1つである。単一の規則としてまとめることができないという点で、一人前の言語だと言えないとして、このバリエーションの認定に異議を唱える研究者もいる。本稿に挙げる特徴は主に Van Laere (2003)および Goossens (2000)を参考にしたものである。例文はこれらの研究からの引用である。それ以外の例文は発表者がオンライン新聞 *Gazet van Antwerpen*(アントワープ新聞、以後 GvA と省略、ホームページ www.gva.be)を検索し、収集したものである。

であるがオランダ語中間言語によく見られる。

- (1) GvA20/01/2001 ... medisch personeel wordt gewaarschuwd voor slachtoffers “die op ongebruikelijk grote schaal zijn blootgesteld geweest aan verarmd uranium.” (Medical personnel is warned for victims who have been exposed to depleted uranium on an extremely large scale.)
標準語的な語順：blootgesteld geweest zijn/blootgesteld zijn geweest.

2.1.2 二人称代名詞

【表 1】二人称代名詞

	ガ格	ヲ・ニ格	ノ格
標準語	jij/je	jij/je	jouw/je
オランダ語中間言語	gij/ge	u	uw

- (2) (標³) Jij bent de tweede persoon die dat zegt tegen mij. (You are the second person who tells me this.)
(中) Gij zijt [t]e tweede persoon die da(t) [s]legt tegen mij. (Van Laere 2003: 122)

話者は必ずしも全ての環境で一貫してオランダ語中間言語を使うというわけではない。Deprez (1985:112)によると標準語的な“je”の使用はガ格に多く、ヲ・ニ格、およびノ格に非標準語的な人称代名詞が多い。

- (3) (標) Dat vreet aan je want je slaapt minder; je moet zorgen dat je partij op de sporen blijft. (This burns you up because you sleep less; you have to make sure your party stays on track.)
(中) Dat vreet aan u (ニ格) want je (ガ格) slaapt minder; je (ガ格) moet zorgen dat uw (ノ格) partij op de sporen blijf. (Van Laere 2003: 122)

2.1.3 冠詞および形容詞の屈折

定冠詞、不定冠詞、所有代名詞、指示代名詞、および形容詞などが標準語と異なった屈折をする。もしくは標準語において屈折しないにもかかわらずオランダ語中間言語において屈折する。ここでは冠詞および形容詞について記述し、Goossens (2000)がまとめた屈折の規則を補充する。屈折は後続する名詞の性および数によって行われる。不定冠詞はオランダ語標準語において屈折しないが、オランダ語中間言語においては名詞の性によって形が変わる⁴。定冠詞は標準語の場合、2つの形がある。男性名詞および女性名詞(単数形・複数形を問わず)は“de”をとる。中性名詞は単数の場合“het”をとり、複数の場合“de”をとる。それに対して、オランダ語中間言語の場合、女性名詞は同様であるが、男性名詞の場合、次の単語が単数形で、語頭が母音か h、d、または t の場合“den”が、次の単語が複数形で母音か h で始まる場合、“d”が使用される。中性名詞の単数形は省略形“’t”を使用し、複数形で、語頭が母音か h の場合のみ“de”が“d’”になる。表 2 は標準語とオランダ語中間言語における不定冠詞及び定冠詞のそれぞれの形をまとめたものである。

形容詞は後続する名詞の性および数、そして先行する冠詞によって屈折される。標準語

³ (標)は標準語の例を、(中)はオランダ語中間言語の例を指し示す。

⁴ 不定冠詞の複数形は存在しない。

においては、不定冠詞と単数形の中性名詞の間に位置する形容詞のみが辞書形で現れるが、他の場合、形容詞の辞書形に・eが付く。オランダ語中間言語においては、後続する単語の語頭や形容詞の語尾によって形が変化する。表 3 が形容詞の屈折をまとめたものである。「形」は「形容詞の辞書形」を意味する。

【表 2】不定冠詞および定冠詞

	不定冠詞				定冠詞			
	標準語		中間言語		標準語		中間言語	
	単数	複数	単数	複数	単数	複数	単数	複数
男性名詞	een	∅	ne nen*	∅	de	de	den*	de d'***
女性名詞	een	∅	'n	∅	de	de	de d'***	de d'***
中性名詞	een	∅	'e 'n**	∅	het	de	't	de d'***

*次の単語が母音か h、d、または t で始まる場合。

**次の単語が母音か h で始まる場合。

【表 3】形容詞の屈折

	標準語				中間言語	
	定冠詞+形容詞		不定冠詞+形容詞		(不)定冠詞+形容詞 単数	(不)定冠詞+形容詞 複数*
	単数	複数	単数	複数*		
男性名詞	形+e	形+e	形+e	形+e	形+e/ten**	女性名詞単数形と同様
女性名詞	形+e	形+e	形+e	形+e	形 形+e*** 形 - d+i****	女性名詞単数形と同様
中性名詞	形+e	形+e	形	形+e	形*****	女性名詞単数形と同様

*不定冠詞の複数形はなく、形容詞のみが名詞の前に現れる。

**次の単語が母音か h、d、または t で始まる場合。

***形容詞の語尾が p、t、k の場合。

****形容詞の語尾が d の場合、-d が省略され、-i が追加される。

*****形容詞の語尾が d の場合、-d が省略され、-i が追加される場合がある。

以下いくつか例を挙げるが、標準語と比べてオランダ語中間言語に変化がない場合、あえて例を見せないことにする。

- (4) (標) een/de aap (a/the monkey(男性名詞)) vs. (中) nen/den aap
een/de grote aap (a/the big monkey) vs. ne/de groten aap
de apen (the monkeys) vs. d' apen
- (5) (標) een vrouw (a woman(女性名詞)) vs. (中) 'n vrouw
een/de arme vrouw (a/the poor woman) vs. 'n/d' arm vrouw
(de) arme vrouwen ((the) poor women) vs. (d') arm vrouwen
- (6) (標) een/het kind (a/the child(中性名詞)) vs. (中) 'e/t kind
een goed kind/ het goede kind (a/the good child) vs. 'e goe kind/'t goei kind

2.1.4 「二重」という現象

文法的要因を二重に使用することがオランダ語中間言語によく見られる現象である。

1) 動詞 “gaan”(行く)の二重使用

一般的な意味「行く」のほかに、“gaan”は未来を表す助動詞の機能を持つ⁵。中間言語において“gaan”は一文中で、それぞれの意味を同時に表すことができるが、標準語ではそれは不可能である。

- (7) (標) Ik zal mij in Ierland gaan vestigen. (I will go and settle in Ireland.)
(標) Ik ga mij in Ierland vestigen.
(中) Ik ga mij in Ierland gaan vestigen. (Van Laere 2003: 127)

2) 一人称代名詞(単数・複数)の二重使用

一人称代名詞の二重使用の機能は明確ではないが強調のために使用されると考えられる。

- (8) (標) Wij gaan/zullen ook discussiëren (We will also discuss)
(中) Wij gaan wij ook discussiëren. (Van Laere 2003: 130)
(9) (標) Dan moet ik minder betalen (Then I have to pay less)
(中) Dan moet ukik minder betalen. (Van Laere 2003: 130)

例(9)の場合、“ukik”は単数形の一人称代名詞“ik”が二重(“ik ik”)に使用された上、語頭の“i”が“u”に変化したものである。

3) 二重否定

二重否定は標準語においては許されないが、方言やオランダ語中間言語において文章の否定的な意味を強調するためよく使用される。

- (10) (標) De dag dat men niks meer plant (the day one no longer plans anything)
(中) De dag da(t) men nieks nie(t) meer plant. (Van Laere 2003: 131)(直訳: the day one no longer plans nothing)
(11) (標) Daar heeft niemand twijfel over (No one doubts that)
(中) Daar heeft niemand geen twijfel over. (Van Laere 2003: 131)(直訳: No one has no doubt about it)

例えば、例(11)の場合、否定を表すため“niemand” (no one, nobody)が十分だが、オランダ語中間言語では強調のため“twijfel” (doubt)も“geen”(no)の追加によって否定される。

2.1.5 過去分詞の余剰使用

過去形の受動文を表す構造は助動詞“zijn” (to be)+動詞の過去分詞であるが、外国語(主にドイツ語)または方言の影響によって“zijn” (to be)の過去分詞(“geweest”)、または現在形の助動詞 worden (to become)の過去分詞(“geworden”)が追加される場合がある。Haeseryn et. al. (1997:527) はこのような追加は非文法的であると指摘している。

- (12) (標) De wagen is omringd, mijn kinderen zijn bedreigd. (The car was surrounded, my children were threatened)
(中) De wagen is omringd geworden, mijn kinderen zijn bedreigd geworden (Van Laere 2003: 129)

2.2 語彙

1) “weer”, “opnieuw”(再び、また)の代わりに “terug”(後方へ)の使用

Cockx (1998)によると “terug” は空間の中の動きを表し、“weer”、“opnieuw”は時間的

⁵ 一般的に、助動詞“zullen”は必ず実現する未来と確実ではない未来を表すが、“gaan”は確実に実現される未来のみ表す。

な繰り返しを表す。Van Laere (2003:132) によると方言において“weer”は正しく使用されるが、中間言語においては過剰訂正が行われ、“terug”の使用が見られる。

(13) (標) Het is Bert die de VU opnieuw/weer omhoog heeft getrokken. (It is Bert who has made the VU popular again)

(中) Het is Bert die de VU terug omhoog heeft getrokken. (Van Laere 2003:131)

2) “omwille van”(のために)

標準語“omwille van”は目的を表すが中間言語においては原因また理由を表す。

(14) (標) Ik heb zes weken in het gips gezeten door (een ongeval tijdens) een tenniswedstrijd. (I have been in a cast for six weeks because of (an accident during) a game of tennis.)

(中) Ik heb zes weken in de gips gezeten omwille van een tenniswedstrijd.

例文(14)(中)を標準語的に直訳すれば「テニスの試合のために6週間もギプスしていた。」となるのだが、話者はもちろん「テニスの試合(中に起こった事故)のせいで6週間もギプスをしていた。」と言おうとしていた。文脈がはっきりしていなければ聞き手は解釈に迷う場合がありうる。

2.3 音声

2.3.1 方言の影響

音声には、方言の影響が最も明らかである。たとえ標準語を使用していても、発音からどの地方の出身であるか判断することはそれほど困難ではない。ベルギー北部の方言は大きく4つに分けられる(Taeldeman 2005)。それは西フランダース(West-Flanders)、東フランダース(East-Flanders)、ブラバント(Antwerp + Flemish Brabant)およびリンブルグ(Limburg)である。

特徴として以下のように挙げられる。西フランダースでは、[h] は発音されないか [ɣ] として発音される(例 15)。また、[ɣ] は [h] として発音される(例 16)。東フランダースでは、短い母音が開かれて発音される(例 17)。ブラバントでは、短い母音が鋭く発音され(例 18、19)、長い母音が開かれて発音される(例 20)。リンブルグでは、発音が遅く、ことばが伸ばされて発音される傾向が見られる(例 21)。さらに、無声の子音が有声音になる(例 22)。

(15) (標) rusthuis→rust[ɣ]uis (elderly home) (16) (標) gaan→[h]aan (go)

(17) (標) Zij werkt→Zij w[ɛ]rkt (She works) (18) (標) kunst→k[y]nst (art)

(19) (標) kant→k[ä]nt (lace)

(20) (標) Vlaanderen→Vl[a:]nderen (Flanders)

(21) (標) hond→ho~nd (dog)

(22) (標) niet juist→nie jui[z] (not correct)(-t の省略がフランダース地方全体の特徴)

2.3.2 フランダース地方全体

いくつかの標準語から外れる発音の特徴がフランダース地方全体に分布している。まず、語頭の-h が省略される特徴である(例 23)。さらに、-t の変化が挙げられる。標準語では、単語内に[t]と[d]が続く場合、[t]は有聲の[d]の影響で[d]と発音される(逆行同化(regressive

assimilation))。オランダ語中間言語の場合、進行同化(*progressive assimilation*)が行われ、[t]に続く[d]が[t]と発音される(例 24)。語尾の-t が省略される場合も多い(例 25)。

(23)(標) hebben→ebben (to have)

(24)(標) voortdurend(発音が voortdurend となるはず)→voorturend (continuously)

(25)(標) Denk je dat?→Denk je da? (Do you think so?)

2.4 ブラバント方言によるほかの方言への影響

Goossens (1970)は始めてブラバント方言が他の地方のことばづかいへ影響を与えていることを指摘し、ブラバント拡張(*Brabant expansion*)と名づけた。ブラバント地方以外の地域の住民がオランダ語中間言語を使用する際にも、ブラバント方言の影響が見られる。ブラバント地方は昔から権力の中心であり、現在でも行政が集中している地域である。したがって、他の地方の住民は標準語ではないブラバント方言が威信のあるバリエーションだと判断し、真似ようとする。また、その威信のある方言が標準語であるに違いないと誤断し、自らの方言より使用とする。例(26)が語彙レベルでの例である。

(26) 標準語: slager (butcher) ブラバント方言: beenhouwer

リンブルグ方言: slachter/slechter リンブルグ地方の中間言語 beenhouwer

文法の面では、2.1.2 節で取り上げた二人称代名詞の非標準的な使用はブラバント地方の影響を受けて、他の地方に広がったものである。例えば、西フランダースでは、標準的の“je”が、リンブルグ地方では“zje”が一般的であったが、これらの地方の中間言語使用者が使用する“ge”はブラバント方言に由来するものである。

3. 背景：ベルギーの言語事情

ベルギーでは、スイスのように地域によって、使われる言語が異なっている。南部ではフランス語、北部ではオランダ語、そして東南部のごく小さな地域ではドイツ語が使用される。南部と北部が隣接する地帯はバイリンガルな地域に近いといえる。現在では、その3ヶ国語(フランス語、オランダ語、ドイツ語)が公用語となり、たとえば教育や行政、テレビの放送などがそれぞれの地域に制定されている公用語で行われる。

しかし、過去スペインやフランスの占領下にあったベルギーは独立してからの歴史がまだ浅い。そのような3ヶ国語を公用語として持つ国にオランダ語がどのような立場を持ち、そして、オランダ語中間言語の発生につながった要因についてこの節に記述する。

3.1 オランダ語標準語の発展

低地三国は 1585 年の宗教革命の影響でプロテスタントであった北部(現在のオランダ)と、カトリックであった南部(現在のベルギー・ルクセンブルグ)に分裂した。それに際して、当時、南部に住んでいたプロテスタントの貴族や行政に関わっていた人々、職人、学者などが北部に移り住んだ。北部の中心となったアムステルダムでは、アムステルダム方

言と南部からの移民⁶の言語的特徴からオランダ語の標準語が生じた。書きことばにおいても、南部の学者による影響が大きかった⁷。

一方、南部地域では、北部(現在のベルギー北部、フランダース地方とほぼ一致する)の一般庶民は以前から使用していたオランダ語方言を使い続けていた。また、行政はフランス語で行われ、オランダとの交流も少なかったため、オランダ語標準語との接触はほとんどなかった。その後、1814年から1830年までベルギーはオランダに合邦されたが、言語の面までその影響は及ばなかった。1830年に独立した後は、フランス語が公用語となり、行政や高等教育などはすべてフランス語のみで行われ、オランダ語標準語の役割は20世紀に入るまでなかった。

3.2 ベルギーにおいてオランダ語標準語および方言に対する態度

多くの場合、標準語はエリート階級が使用することばを基に出来上がることばであり、威信のあることばである(Geerts et al. 1985)。したがって、下の階級は社会に出世するための1つの手助けとして、方言を避け、エリート階級のことばづかいを真似る。多くの場合、エリート階級のことばづかいと下の階級の方言とは同じ言語の異なるバリエーションである。しかし、独立後のベルギーでは状況が異なり、エリートはフランス語を使っていたのに対し、一般庶民はオランダ語方言を使用していた。要するに、彼らの母国語と国の公用語・標準語が関連していなかったのである。その後19世紀後半から20世紀にかけてオランダ語を公用語とすることを求める運動が始まり、次第に高等教育などもオランダ語で行われるようになってきた。しかし、公用語として提案されていたのは、ベルギー北部で使用された方言ではなく、17世紀からオランダで発展を続けた標準語であった。3.1節でも触れたように、オランダとベルギー北部には交流がほとんどなく、ベルギー北部の方言とオランダにおいて使用される標準語の間にはかなりのギャップがあった。この標準語が導入される際、ベルギー北部の住民の多くが劣等感を覚えた。それは彼らがオランダと同じ言語を話すといわれながら、実際には標準語を正しく使えなかったからである。これが1980年代からのオランダ語中間言語の発生の要因の1つとなると考える。

4. オランダ語中間言語の発生

4.1 発生時期とその要因

オランダ語中間言語がいつから使用されるようになってきたのかについては明確ではないが、1980年代から2つの要因によって使用が増加したと考えられる。第1の要因として住民の移動性、第2の要因としてメディアにおける変化が挙げられる。

⁶ 南部は15・16世紀に権力の中心であったため、移民は北部にとっても地位と威信の高い者であった。したがって、南部の言語的特徴が北部で受け入れられた。

⁷ 南部の学者による協力によって1637年にできた欽定蘭訳聖書はいわゆる初のオランダ語文法書だといえる。

4.1.1 移動性

ベルギー北部は様々な面で保守的であったといえる。例えば、就職は住まいにできるだけ近い場所がいいということ、また、新しく家を建てる場合、生まれ育った家に近いところで建てることなどが挙げられる(Devos 2005: 3)。今でもこのような考えは根強く残っていると考えられる。しかし、都会にあこがれて引っ越す若者や仕事の影響でどうしても遠くまで通わないといけない人が 1970 年代から増えてきた。このように移動性が増したことによって、異なる方言を使う人同士が接触し、同時に共通することばの必要性も増してきた。互いの方言がまったく通じないということは少なかったであろうが、コミュニケーションを促進するため標準語が使われるようになり、そして標準語をうまく使えなかった場合には、オランダ語中間言語が使われるようになってきた可能性が高い。

4.1.2 メディアの変化

標準語の普及に大事な役割を果たす機関として、教育およびメディアが挙げられる。教育場面では標準語のすべての要素(読む・書く・聞く・話す)と接触するが、メディアの場合、受容的な面(聞く・読む)がより強い。メディアの中でもテレビとラジオの影響は特に大きいといえる。ベルギー北部では 1980 年代後半まで国営放送としてラジオが 3 チャンネル、テレビが 2 チャンネルあったのみで、これらは全てオランダ語を使用していた。これらは言語の面で規範的な役割を担っており、視聴者に「正しいオランダ語」を教えることを使命としていた。そのため、ニュース番組などは標準語で放送され、方言の間違いを取り上げる番組も作られた。一方で、テレビに関しては 2 チャンネルのみで放送できる番組の幅に限界があったため、オランダ語話者はベルギーの国営放送のほかに標準語で放送されるオランダのテレビを頻繁に視聴していた。つまり、ベルギー北部住民は 1980 年代後半まではオランダ語標準語との接触が高かったため標準語の定着が十分に考えられたのである。だが、テレビで使用される標準語は改めて準備されたテキストが多いため、日常会話としてはフォーマル過ぎて、不自然な点もあり、人々の嗜好に合わなかった(Cajot 1998:1003)。そのため、ベルギー北部での標準語の使用は完全には定着しなかったと考えられる。

さらに状況は、民間放送が法的に可能になってからかなり変化した。番組の幅が増加した上、オランダ語で作成されたドラマなども増えた。その影響で、オランダのテレビを視聴する人が減り、ベルギーがオランダ語の基準として認めてきたオランダのオランダ語標準語との接触が急激に減った。民間放送は規範的な役割を担うことなく、ドラマなどをもっと自由に作成し、使用されることばづかいは、標準語よりオランダ語中間言語の方が多。情報を提供する番組(ニュースやドキュメンタリーなど)は標準語で行われていても、インタビューでは標準語から離れたバリエーションが多く使われる。このような標準語にこだわらない番組が非常に人気になったことで、国営放送は競争のため、オランダ語中間言語を使用した番組作りをせざるを得ないようになった。現在でも視聴者に「正しいオランダ

ダ語」を教えることを使命としている国営放送は方針としてできる限りオランダ語中間言語を避けるが、番組によっては使用することを認めている(Hendrickx 1998)。

言語のあるバリエーションを聞くこととそのバリエーションを話すことの間には相互作用がある。これは、要するに、頻繁に耳にして、気に入ったバリエーションの使用が増加するということである。オランダ語中間言語も同じ状況にある。メディアにおいて使用が増加したバリエーションを、視聴者が聞き、使うようになる。それによって、そのバリエーションを聞くチャンスがさらに増加し、人々の間で定着する。ますます人気になっている中間言語と比べて、標準語がそれほど定着しなかった理由は、標準語を肯定的に受け止める人がそれほど多くなかったからであろう。

4.2 用語

オランダ語中間言語というバリエーションには様々な呼び方があるが、否定的なものが多いといえる。さらに、十分に現象を捉えていない用語もある。

1) Verkavelingsvlaams⁸: 新住宅街フラマン語

1989年に当時アントワープ市のオンブズマンだった人によって造り出された用語である(Van Istendael 1989)。分譲地区に新しくできた住宅街で使用されるオランダ語を指す。このような住宅街に住む者は中流階級やそれ以下の者が多く、治安の面などで評判がよくない場合もある。住民は方言を避けて標準語を使おうとするが、間違いが多く中途半端な結果になる。

本稿で取り上げるオランダ語中間言語は使用地域がこのような新住宅街にとどまらない上、中流階級のみならず上流階級にまで普及している点で、Verkavelingsvlaamsとは異なる。この用語は標準語を話そうとする努力を認めず、間違いのみを強調するものであるため、言語学的な研究に適切ではないと考える。

2) Soapvlaams: ドラマシリーズフラマン語

海外のものを字幕で放送することが主流であったテレビドラマだが、1980年代からベルギーで作成されるものが増加した。オランダ語圏で放送されるドラマはオランダ語で作成されるが、標準語のものは少ない。現実を忠実に反映するなら、ドラマ内、方言を使うのがもっとも適切だろうが、多くの視聴者に理解してもらうため、方言と標準語の混ざり合った言語が使用される。しかし、ドラマに使用されることばづかいは不自然なところ、例えば大げさな表現など、が多く見られる。にもかかわらず、ドラマシリーズがオランダ語中間言語の普及に大いに貢献していることは4.1.2節で説明したように、間違いない。

3) Tussentaal: 中間言語

オランダ語中間言語の研究において Tussentaal は、一般的にオランダ語標準語と方言

⁸ Vlaams: フラマン語のこと: ベルギー北部、いわゆるフランダース地方で使用されることばづかいだが、ベルギーは国としては、北部のことばを「オランダ語」と見なしている。

の間に位置するバリエーションという意味で使われる。

“Tussentaal”は“Interlanguage”の直訳である。“Interlanguage”は Selinker (1972)によって提案され、第二言語習得の分野で使用される用語である。この分野では、中間言語というのは学習者が目的言語をまだ完全に習得していない途中の段階を指す。学習者は自らの母語の影響などによって文法的な間違いをしたり、発音が不自然であったりする。だが、中間言語は学習過程の途中の段階に過ぎず、学習者はいずれ目的言語へとステップアップする。オランダ語中間言語はこれとは多少意味が異なるが、解釈によって一面では非常に似ているともいえる。通常、オランダ語中間言語は標準語と方言の間に位置するバリエーションを指す。第二言語習得と違って、話者の母語と目的言語が同じなのである。しかし、話者の方言(母語)と目的言語(標準語)がかなり離れているという点では、Interlanguage に似たようなプロセスが考えられる。要するに、途中段階にいるオランダ語中間言語の話者がいずれ目的言語、つまりオランダ語標準語を使用するようになり、中間言語の使用をやめる。この段階を経てオランダ語中間言語の使用がなくなるというのは、オランダ語中間言語を否定的に捉える言語学者にとっては理想的なシナリオである。しかしながら、現在、使用が一向に減らない状況を見ると、オランダ語中間言語は途中段階というより、標準語と方言の間に位置する一つの言語的バリエーションだといった方が適当であろう。

この Tussentaal に the (「小さい、～ちゃん」という意味)という指小辞を付加し、まともで完全な言語ではないという軽視の意味で使用する人もいる。

しかし、Tussentaal という用語自体はいくつかの用語の中で最も中立的であると考えられる。それは、この用語が「フラマン語」という語を含まないからである。なぜなら、「フラマン語」を含んでいる他の用語は、それが「オランダ語」と比較して、十分に発育した言語的バリエーションではなく、方言に過ぎないという意見に基づいて作られた用語だからである。こういった理由で、現在、言語学の研究においては、Tussentaal が最も使用されている。

5. オランダ語中間言語の機能

オランダ語中間言語は主に 2 つの機能を持つと考える。第 1 に、より広い地域でコミュニケーションをとること、そして第 2 にグループに属することや親しみを表現することが挙げられる。この 2 つの機能はある程度重なり合い、話者は常に 1 つ以上の機能を利用していると考えられる。

5.1 コミュニケーションを図る

中間言語の使用は話者が方言をコミュニケーションの妨げとして認識し、他の言語的バリエーションを探すなかで、中間言語にたどり着いたということを示す。中間言語にたどり着く過程は大きく 2 つに分けられる。

1) 標準語が十分に話せないためオランダ語中間言語を選択する

3.2 節でも触れたように、標準語は多くの場合、上流階級から発生し、他の階級に普及

する。ベルギーが独立した 1830 年当時、上流階級はフランス語を使用し、ベルギー北部の一般庶民はフラマン語の様々な方言を使い続けていた。20 世紀初めごろ、北部の中流階級は経済的および政治的に十分権威を得て、オランダ語標準語を導入する運動を開始した。しかし、オランダで使用されていた標準語は、実際ベルギー北部において使用されていた方言とのギャップが大きく、一般庶民にとって方言から標準語に切り替えることは容易ではなかった。以降 1980 年代までベルギー北部のオランダ語は不完全なものと考えられ、オランダのことばづかいを取り入れることを目指す政策が行われてきた(Decaluwe 2005: 53)。しかし、何が正しいことばで、何がそうでないかは判断しにくく、また、話者が自分の使用言語に劣等感を覚えたことで、「言語的不安」が生じた⁹。1980 年代後半から政府の言語政策はベルギー北部のオランダ語がオランダのオランダ語と異なっていることを認めるようになった。その結果として、今日でも話しことばにおいて方言が多く残っている¹⁰。一方で、方言では適切ではない場面もあると認め、他のバリエーションを目指す人は多い。彼らは中間言語を使用する第 1 のグループであると考えられる。

オランダ語中間言語を使用するこの第 1 のグループは 2 つに分けられる。1 つ目は自らの方言を使いたくないという理由でオランダ語標準語を目指す、完全には成功しないグループである。このグループはコミュニケーションのためや、または就職のためなど標準語の必要性を認めるが、使い続けてきた方言の影響が強く残り、結果的に彼らのことばは方言と標準語の間に位置する中間言語となってしまう。2 つ目はオランダ語中間言語を「母語」として親から習ったグループである。

これらの第 1 のグループは標準語習得の途中段階にいて、標準語を目指し続けるか、これから標準語をあきらめて中間言語を使い続けるかには、個人の意志と社会での中間言語の人気の両方が関わっていると考えられる。さらに、このグループは幅広い場面で中間言語を使用すると考えられる。

2) 標準語を話したくないためオランダ語中間言語を選択する

オランダ語中間言語を使用する第 2 のグループは自分の意志で標準語を話すことを選択しないグループである¹¹。動機はいくつか挙げられる。まず第 1 に、標準語の使い心地がよくないという動機である。これは標準語が十分に話せないグループに多い。いわゆる方言を母語として習ったため、標準語を使い慣れておらず、話すとき自分を強く意識してしまい、言いたいことを適切に表現できなくなってしまう。その結果、彼らは相手とのコミュニケーションを考慮し、標準語の特徴と方言の特徴とを取り入れた中間言語を用いる。

⁹ 2.2 節で挙げられた “terug” の過剰訂正は言語的不安による間違いだと考えられる。実は、方言話者は “weer” を正しく使用しているが、「方言は正しくない」とよく言われているせいで、不安になり、間違っ “terug” を使ってしまうのである。

¹⁰ 1980 年に設立された Nederlandse Taalunie(オランダ語言語協会)が 2005 年 9 月 9 日に発表したアンケート結果からベルギー北部住人の 76% が方言を重要と考え、保持したいと考えていることが明らかになった(Nederlandse Taalunie 2005)。なお、オランダでは方言を重要と考える人が 60% にとどまる。また、実際の使用に関する数字はないが、ベルギー北部において家庭の中では多くの場合、方言が使用されるとされている。

¹¹ このグループは標準語が話せる話者と話せない話者を含む。

第2に、オランダに対する反抗の気持ちが挙げられる。それは、オランダから独立したにもかかわらず、元の支配者の言語を受け入れないといけないことへの反抗心である。現在それほど強い反抗感を持つ人は少ないが、フラマン人のアイデンティティを失いたくないため、オランダの標準語をそのまま取り入れず、意図的に中間言語を選択する人は少なくないと考ええる。

第3に、標準語が高慢に聞こえるため、使いたくないという動機が挙げられる。

標準語を話したくないグループは意識して中間言語を選択しているため、いずれこの使用を完全にやめる可能性は少ないと考える。しかし、場面を考慮して、いくつかのバリエーションを使い分ける可能性は十分に考えられる。

5.2 親しみ感

中間言語のもう1つの機能として、あるグループに属することを表現する、または、相手に親しみ感を与えるというものがある。この場合、話者は意図的にオランダ語中間言語を選択しており、それが自分の目的に達成する重要な手段の1つとなっている。したがって、目的を達成した後は比較的容易に他のバリエーションにスイッチする傾向がある。この機能は政治家が一般庶民と話す場合やカウンセラーが来談者と話す場合などに顕著である。政治家¹²の場合、彼らは普段標準語を使用するが、一般庶民と直接話す際やインタビューなどを通して一般庶民にアピールしようとする際、意図的に中間言語を選ぶ現象が見られる。それは、自分が「普通の人間だ」「一般庶民に属している」というイメージを強調するためであると考えられる。また、カウンセラーの場合¹³、来談者に親しみを与えるため、または距離感を縮めるため、標準語を避ける。この場合カウンセラーと来談者が同じ方言話者とは限らないので、特定の方言ではなく中間言語を選択する。

挙げた例から分かるように、オランダ語中間言語のこの機能を利用する人々は教養のある職業の人が多く、彼らは標準語環境で育った可能性が高い。したがって、標準語が話せないという消極的な理由でオランダ語中間言語を使用する話者より容易にいくつかのバリエーションを使い分けられると考える。

6. これからの発展

6.1 話しことば

上記のほとんどは話しことばについての議論である。Geeraerts (1999)は話しことばのこれからの発展について3つのシナリオを提示している。

- 1) 第1のシナリオ：中間言語はこれから標準語に近づき、標準語のインフォーマルな話しことば的バリエーションになる。

しかし、現在の言語政策はベルギー北部のオランダ語とそのモデルとなったオランダの

¹² 政治家のことばづかいを分析した Van Laere (2003)を参考。

¹³ 発表者とカウンセラーのやり取りに基づく。

標準語との差異を許容する方向に向かっている。それと同時に方言の間違いを直すプログラム(テレビ番組、新聞コラム)も少なくなった。この現状を考慮すれば、このシナリオのように中間言語が標準語に近づく可能性は低いと筆者は考える。

2) 第2のシナリオ：中間言語と標準語との距離が安定した状態を保つ。

標準語の必要性と役割を人々は認めるが、日常的な使用には向いていないため、中間言語がその役割を果たす。

3) 第3のシナリオ：オランダ語標準語がインフォーマル化して、中間言語に近づく。

これは、第1のシナリオの逆の動きである。しかし、書きことばにおいても標準語がインフォーマル化してしまうなど、いろいろ問題が現れると考える。

6.2 書きことばへの普及

オランダ語中間言語は果たして話しことばに限って観察される現象なのであろうか。筆者は、オランダ語受動文における過去分詞の余剰使用(2.1.5節を参照)を、新聞記事および質問紙調査をデータとして研究している。それはこのような余剰使用が書きことばにまで普及しているかどうか、そしてすべての使用を「余剰的」と見なしてよいかどうか、調べるためである。あくまで調査途上の結果ではあるが、一般的に標準語で書かれていると考えられる新聞記事においても過去分詞の余剰使用が見られることが判明した。中間言語の1つの要素が書きことばに表出していることで中間言語が書きことばにも浸透しつつあるというのは性急すぎるが、興味深い結果でもある。さらに、質問紙調査も分析途上ではあるが、30代～50代の世代より若い世代(10代)の方が過去分詞の余剰使用を許容する傾向にあることが判明した。このような傾向が標準語にどのような影響を及ぼすかこれからの課題とする。

【参考文献】

- Cajot, J. (1998) Een omgangstaal voor alledag, Vlaanderens eigen weg. In: *Streven* No.12, pp. 999-1008
- Cockx, P. (1998) *Taalwijzer*. Leuven: Davidsfonds.
- Decaluwe, J. (2005) Belgisch Nederlands versus Nederlands Nederlands. In: *Wetenschappelijke Nascholing* Rijksuniversiteit Gent, pp. 49-58.
- Deprez, K. (1985) De aard van het Nederlands in Vlaanderen. In: *Heibel* 19:4, pp. 101-127.
- Devos, M. (2005) Taalsituatie en taalontwikkeling in Vlaanderen. In: *Wetenschappelijke Nascholing* Rijksuniversiteit Gent, pp. 1-12.
- Geeraerts, D. (1999) Noch standard, noch dialect. 'Tussentaal' in Vlaanderen en Nederland. In: *Onze Taal* 9, p232-235.
- Geerts, G. & Hellemans, S. & Jaspaert, K. (1985) Een alternatieve benadering van het standardisatieproces in Vlaanderen. In: *Standaardnederlands en dialect op school*,

- thuis en elders*. Brussel, studiereeks VUB, pp. 189-201.
- Goossens, J. (1970) "Belgisch Beschaafd Nederlands" en Brabantse expansie. In: *De Nieuwe Taalgids Van Haeringnummer*. Groningen: Wolters Noordhoff, pp. 54-70.
- Goossens, J. (2000) De toekomst van het Nederlands in Vlaanderen. In: *Ons Erfdeel* 43. pp. 3-13.
- Haeseryn et al. (1997) *Algemene Nederlandse Spraakkunst*. Groningen: Martinus Nijhoff, Leuven: Wolters Plantyn.
- Hendrickx, R. (1998) *VRT Taalcharter*. <http://www.vrt.be/doc/taalcharter.doc>
- Nederlandse Taalunie (2005) De Nederlandse taal: feiten, cijfers en meningen, Taalonderzoek in Nederland, Vlaanderen en Suriname. In: <http://taalunieversum.org/taalpeil>.
- Selinker, L. (1972) Interlanguage. In: *International Review of Applied Linguistics* 10:209-31.
- Taeldeman, J. (2005) De regenboog van Vlaamse dialecten. In: *Wetenschappelijke Nascholing* Rijksuniversiteit Gent, pp.1-15.
- Van Istendael, G. (1989) *Het Belgisch Labyrint, of de Schoonheid der Wanstaltigheid*. Amsterdam: De Arbeidspers.
- Van Laere, A. (2003) *Tussentaalelementen in de taal van Vlaamse politici*. Unpublished thesis, National University of Ghent.